

日本細菌学会

関東支部ニュース

第19号

6月の関東支部総会を盛り上げて下さい

第69回日本細菌学会関東支部総会を平成5年6月24日(木)と25日(金)の二日間にわたって開くことになりました。会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

関東支部会の評議員会や各種の委員会では、支部総会の活性化についてながい間熱心な議論を重ねてきました。そして歴代の総会長はそれを実行するための工夫を凝らして、いろいろな趣向を取り入れながら総会を開催してこられました。私も評議員会で交わされてきた議論をふまえながら、6月の総会を少しでも有意義なものにしてみたいと思っております。議論に参加されていた評議員の先生方に座長として、活発な討論を引き出していただくようお願い致します。前回の金ヶ崎士朗会長は宿主防御機構とコンプロマイズドホストを課題として極めて内容の濃いシンポジウムを開催されました。

今回はむしろ、将来の可能性と夢を論じるためのシンポジウムにしたいと思っております。課題の一つは「DNA診断の現状と未来」です。ある種の感染細菌やウイルスを検出するためにDNA診断は欠かせない手段となりました。最近数年の間に、RT-PCRやSSCPなどの新しい技術が次々に開発され応用されるようになり、診断に適したプローブやプライマーも工夫され、便利になりました。第一線で活躍しておられる方々にそのようすを解説していただくと共に、今後どのような方法がこの診断に利用されるようになるか、将来の可能性について大いに論じていただく予定です。

もう一つは「体液性感染防御因子をみなお

総会長 川上正也
北里大学医学部教授(分子生物学教室)



す」という課題です。抗体は感染防御の主役であり、その産生のメカニズムは極めて精緻であるために研究者の興味を独占してきました。しかし抗体以外にも多種類のレクチンが発見され、殺菌などに関与していることが明らかになってきました。しかもその一部は抗体と同じような方法で補体を活性化することがわかり、感染防御の初期反応で、おおいに働いていることが予想されます。今回は、この方面の研究者にお集まりいただいて、系統発生、構造と作用、臨床などの面から解説していただきます。

新宿から小田急線の急行で40分、相模大野下車、駅前の道を2分ばかり歩くと会場のグリーンホール相模大野に行き当たります。すぐ裏が公園になっているので散策しながらの議論もできますし、近くにデパートや食堂街があるので食事にも便利です。若い会員の方々が気軽に参加して下さいよう期待しております。

精いっぱい準備を致しますので、どうか6月の支部総会を皆様のご参加によって盛り上げていただくよう、お願い申し上げます。

カルチャーコレクションにおける品質管理

山 里 一 英 (東京大学教授, 応用微生物研究所)

カルチャーコレクションは微生物株を収集・保存し、研究者に配布する事業である。株の提供を受けて実験を行なう研究者はカルチャーコレクションから見れば“user”である。“user”としての研究者はカルチャーコレクションに対して様々な要望を持っている。研究に必要であると予想される多くの種の株を保存しておいて欲しい、分譲を依頼したら早く送付して欲しい、培地組成・培養条件等の情報を教えて欲しい、分譲費用は安くして欲しい、凍結乾燥アンブルを開封するのは手間がかかるので寒天斜面培養で分譲して欲しい、等々である。カルチャーコレクションの仕事に携わって25年になるが、この間様々な“user”からカルチャーコレクションへの要望に接してきた。

ところで、実は最も重要であるが、強い要望として聞こえてこないのは、株の種が確かにその学名通りに確実に同定されているか、株に間違いはないかということである。恐らくは“user”はこの点について疑問を持つことなく、確かな株であることは当然のこととと思っているのであろう。カルチャーコレクションに責任を持っている一人として、あってはならないことではあるが、一般にコンタミネーションや保存中の株の取り違いの確率は、いかに注意しても零にはならない。また、学名についても、収集の時点で誤同定されていて、見逃されている株もある。カルチャーコレクションは供給する株のidentityについて責任を持っているが、このことこそ最も強く要望されるべきことであろう。私は株の“user”ではないので、コレクションへの要望という、自らが自らに要望することになるが、これは私が株の提供者の立場にあるために、よりよく見えてくることである。

カルチャーコレクションには「品質管理」という言葉がある。恐らく“user”は、そして多くのカルチャーコレクションにおいてさ

えも、株は確実に植え継げば、あるいは凍結乾燥操作を行なえば、保持されると思込んでいるのではなかろうか。しかし、植え換え操作についてみても、コンタミネーションの確率は皆無ではない。25年前、細菌のコレクションを受け継いだ時、2株が *Bacillus cereus* に置き変わっていることに気がついた。2株共に生育の悪い株で、そのため植え換え操作の頻度が高く、いつかコンタミしてしまったのであろう。個々の操作が確実であることはいままでのないが、品質管理においては操作後にチェックして、ミスを取り除き、あるいはミスの疑いのあるものを取り除き、もとの正しい状態を維持しなければならない。

私共の細菌のコレクションでは、乾燥標品を作り直す、新しいアンブルから復元して寒天平板のはじめの部分に植菌する。同時に前のアンブルからおこした寒天培養からも植菌する。両者が生育したところで、その同一の寒天平板上に白金耳で塗り広げて培養する。生育してきた両者のコロニーを実体顕微鏡で観察する。培養時間や培地表面の乾き具合が違えば、コロニーの表面や周縁の性状が微妙に違ってくるものであるが、以上のようにすると、これらの条件のすべてを（前培養も含めて）同一にそろえて観察することができる。以上の操作を私共はアンブル作製の前後の培養が同一であることを確認する一法としている。

品質管理は手間がかかり、一見無駄のように思われる（実際、ミスの疑いのあることは稀である）。しかし、カルチャーコレクションにおいては必須の仕事であり、品質管理、そしてこれが保証する「株が確かであること」が最も重要である。間違った菌株を用いて行なわれた研究は、無駄であるばかりではなく、研究社会にとって有害である。

このような厳しい研究環境の中にあつて、学術研究の推進に果たすこの補助金の重要な役割にかんがみ、加えて、学術研究の高度化・大型化・多様化・国際化及び急速な研究の進展に対応していくため、科研費を一層拡充すべきであり、できる限り早期に1,000億円に拡充する必要があることが各界から強く要望されている。

国立大学協会は、平成2年12月1日、国立大学教官全員53,248人を対象に教育研究費の実態と問題点に関するアンケート調査を行った。そのうち科研費に関する回答は極めて高率で、その審査方法、決定配分の基準が

曖昧で結果的に不公平であるという感をもつ人が多く、現行制度に問題があることを指摘する声が少なくなかった（日本学術会議月報、33巻4号）。科研費に関しては、平成5年度の分科細目の改定と審査委員候補者の推薦学協会の見直しを行った。詳細は日本細菌学雑誌47巻4号631頁の新井正日本学術会議会員の記事を参照されたい。

いずれにしても、科研費に採択される条件は、魅力ある研究課題、研究目的と周到な研究計画に加えて、過去5年間の優れた研究業績が申請書に書かれていることではなからうか。

フォーラム

「大橋先生の思い出」

東京都立衛生研究所

太田 建爾

夜分に聴く電話のベルは、精神的に良くない。

それは土曜日の夜11時頃であった。計報である。先生は薬石効なく、去る6月20日、午後10時、療養中の病院で鬼籍に入られた。先生に最初にお目にかかったのはいつだったか思い出せないが、多分、昭和39年頃だったと思う。当時先生は国立予防衛生研究所にあって、チフス菌のフェージ型別を担当なさっておられた。それから12年後、われわれの上司になられようとは、その時には夢にも思はなかった。

昭和51年10月、都立衛生研究所に参事研究員として来られ、微生物部内に先生の部屋が用意された。そして主に病原ビブリオをはじめ、腸管系病原菌に関する研究を指導して頂いた。この間、いつも感じていたことは、大変几帳面な人だと思ったことである。実験の最中、われわれはちょっとメモなどをして、後で整理するという様なことをしていたら、「もしもそのメモをなくしたらどうする」と大変きつく叱られた。時々、自らも試験管やビベットを持って実験をなさっていたが、確かにきちんとノートに書き込んでおられた。それも大変詳細に。几帳面といえは、実

験だけでなく趣味や遊びでも同様で、例えば、釣りで糸をつなぎ合わせるにしても、われわれはそれで十分と思っても、先生には不十分で、強度だけでなく恰好などもきちんとしていなければ気が済まない質であった。また、お酒も度々ご一緒させて頂いたが、席上空いたお皿などはすぐ積み上げ整理されたり、そこにタオル等があれば、テーブルは常にきれいに拭かれていた。お酒といえば、昭和49年の第8回腸炎ビブリオンシンポジウムの懇親会の席であった。先生にお酒を勧めたら「日本酒は勧められる俵に飲むと酔っぱらってしまう。だから俺は飲んだ杯を数えながら飲むことにしている」と。確かにその時はそのようであったと覚えている。几帳面な人である。しかし、この化けの皮が剥れ去るのは時間の問題であった。

1年7カ月の療養中「今度、退院しても金輪際、決してアルコールは飲まぬ」と何回も繰り返していらっしやしたが、今では極楽浄土、般若湯なら如何。

「ホチヨハリギヨのこと」

帝人新薬創製研究所

鈴木 洋二

M君はテレビのような四角い大きな顔をして、薄っぺらい帽子をかぶっていた。随分向こうから、私の中学に通ってきていた。彼が

勉強しているところは、一度も見たことがなかった。そんな彼が、中学3年間の付き合いのなかで、たった一度だけ、「勉強関係」でタメになることを教えてくれたことがある。それは「ホチョハリギョ・コテツココタコナンカンヘン・エンコカゲン」という、ジュゲムのような呪文である。これは、生物の進化系統樹の、現時点では正しいかどうか知らぬが、進化したほうからの丸暗記のしかたであり、哺乳類、鳥類、は虫類、と続き、最後は原生類で終わる。私はその頃、まさか今のように、生物学関係で仕事をするとは思っていなかったから、この「ホチョハリギョ」は彼が教えてくれた「勉強関係」で、今も役立ち、感謝している唯一無二のものである。その逆のことはここではとても書き切れない。映画など娯楽関係のこと、婦人雑誌の付録のことを喋る彼の口ぶりには、俄然、他人を引きつけるものがあった。先日、突然、彼から上京しているので「洋、アウベヤ」と電話があった。久しぶりに、つつる頭で巨腹のM君と新宿副都心のビルの一角で飲んだ。「ホチョハリギョ」のことは、忘れていたが、人前で平気でおならをする癖は変わっていなかった。むかしの挨拶を確かめたかったのかも知れない。札幌でラーメン屋を長いことやってきたが、近々、積丹半島の突端で奥さんと二人で人里離れた、「イキモノ」相手の生活者になるのだという。私はなんとなく、羨ましい気がしてならなかった。

「コアラの食性と腸内微生物」

理研・系統保存

辨 野 義 巳

コアラは東オーストラリアの森林に棲む有袋類で、体重約6 kg、体長約45 cmである。しかし、消化管内、盲腸の大きさは170 X 4.5 cmで、体長に対する比率では3.8と他の動物に比べ著しく大きい。きまった食物しか口にしない狭食性の動物の中でも、コアラはユーカリだけしか食べないことでも特筆される。ユーカリにはタンニンが高濃度に含まれている。これは通常、動物の腸内でタンパク分解酵素などに分解されず、食物由来のタ

ンパク質利用の妨げになっている。コアラの糞便には低レベルのタンニンが見出され、コアラの腸内でこれがある程度分解されることも明らかになった。これはコアラの腸内菌がタンニンに結合しているタンパクを分解し、ユーカリ由来のタンパク質の利用性を高めていることによると考えられる。母親の育児嚢にいる子供のコアラはユーカリを食べるのではなく、母親から授かった盲腸便には数多くの細菌が棲息し、独自の腸内フローラを形成している。これらは、ヒトや動物の腸内から分離される *Bacteroides*, *Eubacterium*, *Clostridium* などに属する菌属であるが、その大部分は既存の菌種とは異なる嫌気性菌である。これらは宿主に対してどのような働きをもつか、いまだに解明されていないことが多い。ユーカリのみを食べることを考えると、腸内において最優勢に常在している嫌気性菌のなかにより優れたタンニン分解性を有するものが存在すると考えられる。これまで、コアラの糞便からは *Streptococcus bovis* がタンニン含有培地上でタンニンを分解して発育できる性質を持つことが知られており、これがユーカリの消化に寄与していると報告されている。こうしたタンニン分解性を持つ細菌の分離、同定ならびに応用はヒトや産業動物における食糧や飼料への未利用資源の応用に貢献するものと期待される。

「大学院生のひとりごと」

順天堂大学医学部細菌学

堀 賢

細菌学会が沈滞化しているといわれて久しい状況にあります。私も今年の総会で発表をしましたが、どなたからも御質問や御意見がなく、数々の厳しい質問や貴重なご意見が出ることを期待して張り切って参加した初めての学会でしたが、虚しさが残りました。どうしたらこのような状態を脱することができるのか。駆け出しの分際であります、私個人の意見を暫し、ご拝読下さい。この沈滞モードは多分、多くの発表された知見に対して、学会としてまとめや指針が出されていないために、散漫なまま経過し、高度に細分専門化

した研究者の間で独自の考えが残り、その領域以外の研究者からの貴重な意見が受けられなくなる。受けられないから普遍性がなくなり、他の領域に無関心になり沈滞化する悪循環ができています。現に、社会的に大きな問題になっている薬剤耐性菌でさえ「抗生物質が無効」というのみで、明文化された定義や統一見解が乏しく、混乱を招いている状態です。そろそろ臨床系の学会で出されている診断基準のように、学会としての見解をまとめる必要があるでしょう。co-medical としての臨床検査技師の方面からもその要求度が高まっているようです。巨大化し過ぎた学会でまとまった見解をだすことが困難な場合は、分科会ごとにサイエンスの見地に基づいた提案を出し、総会で活発な討論をするのも良い方法ではないかと思えます。今年の国際ブドウ球菌シンポジウムでの私の発表で、疫学の活発な研究者に貴重なアドバイスを受け、そんな事をふと考えました。もちろん、見解をひとつにまとめる事には反対される先生もおられるとは思いますが、必ずしもひとつにまとめる必要はなく、いくつかのまとめを並立させて活発な討論、研究を行うための布石にすることは意義のある事だと思いますが、如何でしょうか。

「カナダの旅」

東京慈恵会医科大学青戸分院

黒坂 公生

この夏カナダの西から東への観光ツアーに参加してみた。夕方成田を発ったのに、時計が逆廻りをしてその日の午前中にバンクーバーに到着した。しかし実際はジェット機で8時間と少しかかっていた。

翌日ブリティッシュコロンビアの州都ビクトリアの観光に出かけた。これがまた同じ名前のバンクーバー島にあるとは全く知らなかった。島への交通はこれが一般的ということで、フェリーに乗って1時間以上の船旅を楽しむことになった。日本人ならさしずめ橋でも架けてしまいたくるところであるが、日本の26倍もの土地に人口はたったの3000万人弱というお国柄、時間に対する考え方に

大きな隔たりのあることが感じられた。ビクトリア風の議事堂をはじめ古い英国風の建物が多く残るビクトリアは、州都であるというより私には観光地であるとの印象の方が強かった。

カルガリーからバンフ、レイクルーズと廻ってカナディアンロッキーの観光に出かけた。エメラルド色をした静かな湖がある一方で、荒々しい山肌をみせた山並や氷河があり、これらを間近に見た感動はなかなか得難いものであった。バンフ・スプリングス、シャトー・レイク・ルーズに泊まったが、アーケードのお店の中には日本語を話せる店員をおいている所が多く、如何に多くの日本人がここを訪れ、沢山の買物をしていくかを物語っているようであった。

17世紀にフランスの交易の拠点として始まったケベックはセントローレンス川の畔にある。街に立っている案内もフランス語、英の順に書かれていて、フランス語圏にいることを実感させられた。旧市街は城壁に囲まれ、かつて英仏が植民地をめぐる熾烈な戦いをした跡がそこここに見られた。歴史の本をひもどいてみると約250年位前のことである。今の英仏関係からはとても想像できない。これも時の流れがなす業であろうか。

「わが友、わが師」

群馬大学医学部微生物学教室

池 康 嘉

アメリカ合衆国ミシガン大学の Dr. Don. B. Clewell の研究室は *Streptococcus faecalis* (*E. faecalis*) の分子遺伝学的研究の基礎を作ってきた教室である。約20年前カリフォルニア大学サンジエゴ校の Dr. Helinski の Post. Doc. を終え、ミシガン大学に来た彼は未開拓分野の *E. faecalis* の研究を始めた。その初期の研究は、臨床分離株から、実験株の作製に始まり、プラスミドの生物物理的性質、薬剤耐性、エリスロマイシン耐性のトランスポソンの研究等もつばら個々の現象の疫学的研究がなされている。これらの研究から発展し、接合転移トランスポソンの donor replicon からの切り出しと、recipient repli-

con への挿入をともなう転移機構の分子遺伝学的研究や、細菌では唯一のフェロモンの関与する高頻接合伝達性プラスミドの発見と、その伝達機構の研究は、大きな研究プロジェクトとなり進行している。これらの研究において新たな生物学的発見もなされ、また、トランスポソンはグラム陽性菌の研究解析の道具手段として役立っている。この研究の歴史を見る時、未開拓分野の一見混沌としている自然の中の個々の生物現象を客観的観察から分子遺伝学的研究に導く過程を医学細菌学の私達のような一般的研究者に教えてくれるものである。研究面だけでなくこの歴史の中で、研究者間のつながりも作られている。これは Dr. Clewell の人柄の良さからくるものであると思われる。以下は彼の人柄をあらわす話である。大学に定年後名誉教授として研究を継続している生化学の教授（彼は Jay と呼んでいた）がいた。Clewell と彼は Clewell の運転する自動車で相乗り通勤をしていた。それは毎日 Jay が大動脈解離で死ぬまで、おそらく 10 年以上の期間であった。Jay が死んだ時、Clewell は「Jey は死んだ」と一言私に話してくれた。

「職業と価値観の多様性」

明治薬科大学微生物学教室

新井俊彦

硬い話で申し訳ありません。私共の学会が抱える問題に関する事です。私は医学部を卒業し、微生物学教室に学びました。医療の経験は、若い時の市中の小病院での夜間診療と宿直だけです。しかし、看護学校、検査技師学校、さらには総合大学の教養の非常勤講師などを経験させて頂き、現在は薬科大学に居ります。そこで、学生、卒業生と付合わせて頂いた結果、それぞれの職業によって価値観が全く違う事を教えられました。

私共の細菌学会もこれらの価値観を異にする人の集合です。困った事に、これを理解されない議論が多く、その上、学会は何のために必要なのかすら突き詰めて考えられていな

いように思われます。この学会をどうするかについては、別に論ずる事にして、ここでは、価値観の相違の例を述べてみたいと思います。

まず、医学部関係で働く人は、厳密で詳細ではあるが、診断しか眼中にない。薬剤耐性を研究している人は、どんな耐性菌があるかから始まり、耐性遺伝子、耐性酵素までしか興味を示さず、病原性の研究者も遺伝子や毒素を検出・同定すればそれまでである。免疫を研究している人も分子レベルの反応として理解できれば満足する。これらは、いかに詳細であろうとも、診断であって、治療には役立たない。正しい診断が治療に必要なのは当然であるが、医療に本当に貢献する気なら、その研究を更に進める事によって、有効な治療剤の開発に必要な基礎研究ができるにもかかわらずその努力をせず、しかも、医療に貢献しているのは自分のみであると信じて疑わない。問題は、治療剤が自分とは無関係にどこから生れて来て、自分は薬効評価さえすねばすむと考えている事で、しかも、医学研究費を独占しているのである。

薬学にいたっては、更に支離滅裂である。ある人は、微生物薬品製造学の教養としての生物学と考えているし、医学部と同様に、基礎薬効評価のために教えている人もいる。薬品製造の基礎そのものを教えている人もいる。これらは、実はそれぞれの先生が教育しなければならない学生によって違うのであり、それぞれの立場ではいずれも正しいのである。これが合い反する事として議論されることの方が問題であると思う。

細菌学会にはこれ以外にも、診断の迅速正確のみをモットーにする検査関係の先生もおり、歯科、獣医関係の先生のことも考えると、価値観の違いを克服しなければ学会をまとめいけないことは明らかである。学会を活性化し、大きく育てるには、異なる価値観を持つ人を排除するのではなく、それらを取り込んで行く事が必要なのである。

集 会 案 内

- 第13回食品微生物学会
日時：平成4年11月5, 6日(木, 金)
場所：中央区中央会館(有楽町線新高町車徒歩2分)
問合せ先：〒169 東京都新宿区百人町3-24-1
東京都立衛生研究所微生物部細菌第1研究科真菌研究室
☎ 03-3363-3231(内線364)
- 第1回国際腸内フローラシンポジウム -腸内フローラと免疫応答-
日時：平成4年11月12日(木)10:00~16:00
場所：ヤクルトホール
問合せ先：〒105 東京都港区東新橋1-1-19
ヤクルト・バイオサイエンス研究財団 ☎ 03-3574-8986
- 第26回腸炎ビブリオシンポジウム
日時：平成4年11月12, 13日(木13:00-17:00 金9:00-12:00)
場所：エソール広島 〒730 広島市中区富士見町11-6 ☎ 082-242-5250
問合せ先：〒733 広島市西区商工センター4丁目1-2
広島市衛生研究所微生物部 松石武昭 ☎ 082-277-6575
- 第4回臨床微生物学会
日時：平成4年1月23, 24日(土, 日)
場所：日本都市センター(有楽町線永田町下車徒歩4分)
問合せ先：〒173 東京都板橋区栄町35-2
東京都老人医療センター感染症科 稲松考思 ☎ 03-3964-1141
- 第27回緑膿菌感染症研究会
日時：平成5年1月29, 30日(金, 土)
場所：京都市国際交流会館 京都市左京区粟田口鳥居町2-1 ☎ 075-752-3010
演題締切：平成4年11月28日
問合せ先：〒607 京都市山科御陵中内町5
京都薬科大学 微生物学教室 西野武志 ☎ 075-581-3161(内線301)
- 第23回嫌気性菌感染症研究会
日時：平成5年2月27日(土)
場所：エーザイ本社講堂 東京都文京区小石川4-6-10 ☎ 03-3817-5185
演題締切：平成4年12月20日
問合せ先：〒141 東京都品川区東五反田5-9-22
関東通信病院臨床検査科 岡田 淳 ☎ 03-3448-6419
- 第6回臨床微生物迅速診断研究会
日時：平成5年4月17日(土)
場所：神奈川県民ホール(横浜市中区山下町3-1 ☎ 045-862-6901
演題締切：平成5年1月30日
問合せ先：〒227 横浜市緑区藤が丘1-30
昭和大学藤が丘病院臨床病理科 中村良子
☎ 045-971-1161(内線616, 332)

このニュースは春、秋2回、日本細菌学会関東支部総会の一カ月前に発行しております。
皆様の集会予定をお知らせ下さい。

委員会からのご挨拶

学術委員会

委員長 野 沢 龍 嗣

本委員会は春秋の総会長を推薦するのを本務としている。すでに、第69回に北里大学の川上教授、第70回には第一製薬の長田博士の決定を見ていることは評議員会議事録でお分かりの通りである。しかし、学会の活性化が叫ばれているおりから、活性化についての私見をのべることにする。

全国総会の一般演題でしばしば経験することであるが、演題が場違いなセッションに入れられることがあり、この場合、講演後の討論はほとんどなく大変がっかりさせられる。この原因の1つは、演題募集の分類が私の知る限りここ20年ぐらいほとんど変わらないことにあると思う。昨年の場合、12の大分類だけで、そのうち「毒素」と「遺伝」だけは4つの小分類になっている。ですから、例えば「感染」に出すととんでもないところに入れられてしまう事が起こり得るわけである。演題の分類を大幅に見直す事が必要であろう。例えば「ヘリコバクター」とか「レジオネラ」が1つの大分類となり、その中に培養法・構造・病原性・診断等の小分類を入れるという案も考えられる。免疫学会の細かい区分は大変参考になると思う。そして、プログラムにも細かなセッションの名前を入れておけば、そのセッションに興味のある人が多数集まることになると思う。

次に、そのセッションに最も精通した人を座長に選ぶ事が重要であろう。今までは老練さが座長選考の基準なのはないかと勘ぐりたくなる場合があったのではないかと思う。これに演者の質の高い研究内容・見栄えのするスライド・洗練されたプレゼンテーションが揃えば、そのセッションは大変白熱し、活発な討論が繰り広げられるであろう。学会の活性化には、これ以外にも、発想の転換が必要であろうと思う。これからの会長先生には一段の運営努力を、会員には良い演題をお願いするしだいである。

事業計画委員会

委員長 北 野 繁 雄

会則第1条に「細菌学を中心とする領域の学術の進歩を促進する」ことが本支部の目的であることが述べられている。このために、現在は、春秋2回の支部総会と随時の学術集会を催している。しかし、会員の多くには学会活動が低調であるという認識があり、どうしたら活性化できるかを考える場としてこの委員会が作られた。

委員は、井上松久(北里大・医)、内山竹彦(東京女子医大)、金森政人(杏林大・保健)、辨野義巳(理化学研)および私、北野繁雄(明海大・歯)である。

委員の任期は3年であるので、3年目に最終答申を出す事にして、1年目は問題の洗い出し、2年目はアンケート調査とその取りまとめを予定している。アンケート調査は郵送費の都合で、全会員に対してはまだ、行なえるかどうか分かりませんが、全評議員と一部大口会員を持つ機関には必ず行ないたいと思っている。

まだ、委員のフリートーキングの段階で、アンケート案をまとめる段階には到っていないが、紙面を頂いた機会であるから、話題になった内容の一部を紹介して、関心のある会員の皆様からご意見を頂ければ幸いである。

1. 会の目的(案)
 - a. 会員の社会的利益を図る。
 - b. 会員の学術レベルの向上を図る。
 - c. 会員の研究、教育活動を支援する。
2. 新規事業案(案)
 - a. 分野の拡大と会員の興味の分散に対応して、分科会を作り、十分な討論を可能にする。分科会とは別に、その集大成として総会を位置づける。
 - b. 談話会、講習会を開催して、会員の学術レベルの向上を図る。出席者に証明を出す。
 - c. 研究費の紹介、斡旋を行なう。
 - d. 職の紹介を行なう。

議 事 録

第3回評議員会

日時：平成4年9月19日(土)14時～17時

場所：昭和大学

出席者：新井俊彦、五十嵐英夫、池田達夫、伊予部志津子、奥田克爾、北野繁雄、黒坂公生、河野恵、笹川千尋、島田俊雄、竹田多恵、壇原宏文、野沢龍嗣、光岡知足、金ヶ崎士朗(第68回支部総会長)、川上正也(第69回支部総会長)、島村忠勝(支部長)、江川清、戸田真佐子(幹事)

欠席者：井上松久、内山竹彦、岡村登、金森政人、鶴純明、辨野義巳、三上要

議 題：

1. 第68回支部総会の件
金ヶ崎総会長より準備状況の説明がなされた。
2. 第69回支部総会の件
川上総会長の挨拶および準備日程が示された。
期日：平成5年6月24日(木)、25日(金)
会場：グリーンホール相模大野
3. 平成4年度決算報告および平成5年度予算案について
平成4年度決算報告書について支部長より報告があった。また、平成5年度予算案が支部長より提案され、討議の結果、一部修正の上承認された。
4. 会計監査委員の選出
会計監査委員の推薦がなされ、島田俊雄、笹川千尋の両氏が承認された。
5. その他
 - 1) 新井編集委員長より支部ニュース第17号の編集報告がなされた。
 - 2) 日本細菌学会組織検討委員会より”理事会制度について”支部長の意見が求められた。これに基づき組織検討小委員会で議論がなされ本評議員会でも活発な討論がなされた。
 - 3) 第2回評議員会議事録の承認

第4回評議員会

日時：平成4年11月5日 正午

場所：東京大学医科学研究所2階会議室

出席者：新井俊彦、池田達夫、内山竹彦、金森政人、北野繁雄、黒坂公生、笹川千尋、島田俊雄、竹田多恵、壇原宏文、鶴純明、野沢龍嗣、辨野義巳、三上要、光岡知足、金ヶ崎士朗(第68回支部総会長)川上正也(第69回支部総会長)、長田恭明(第70回支部総会長)、島村忠勝(支部長)、江川清、戸田真佐子(幹事)

欠席者：五十嵐英夫、井上松久、奥田克爾、伊予部志津子、岡村登、河野恵

議 題

1. 第68回支部総会会務報告の件
 - ①第68回支部総会に先立って島村支部長より会務報告の内容について説明がなされた。
 - ②島村支部長より平成4年度会計監査報告がなされた。
2. 第69回支部総会準備状況報告
川上総会長より準備状況について説明がなされた。
期日：平成5年6月24、25日(木、金)
会場：グリーンホール相模大野
内容：
6月24日(木)
午前 10:30～12:30 一般講演
午後 14:00～17:00 シンポジウム I
DNA 診断の現状と未来
座長 壇原宏文(北里大・薬)
小野雅夫(北里大・医)
6月25日(金)
午前 9:30～12:30 一般講演
午後 14:00～17:00 シンポジウム II
体液性感染防御因子をみなおす
座長 藤田禎三(福島大・医)
小林邦彦(北大・医)
会費：参加費 正会員 3,000円
学生会員 1,000円
抄録費予約 800円
当 日 1,000円

懇親会費： 1,000 円

宿泊：(参加者の直接申し込み、4月末日まで)

町田 ホテルザ・エルシー

相模大野 グリーンホテル

3. 第70回支部総会準備状況の報告

長田総会長より準備状況について説明がなされた。

期日：平成5年11月5、6日(金、土)

会場：日本薬学会長井記念館

一般講演の他、シンポジウム(感染モデル; 東邦大, 山口教授), 特別講演(Vanderbilt大, プレイザー教授)を予定している。また、企業にうもれている研究の掘りおこしをはかりたいとの説明がなされた。

4. その他

第3回評議員会議事録の承認

<人事消息>

木村貞夫先生 帝京大学医学部細菌学を定年退職。名誉教授 帝京医学技術専門学校副校長に就任。

徳永 徹先生 国立予防衛生研究所所長定年退官。

山崎修道先生 国立予防衛生研究所所長就任。

中谷林太郎先生 日本女子大学家政学部食物学科定年退職。

高橋 勇先生 日本獣医畜産大学獣医微生物学を定年退職。

沢田拓士先生 日本獣医畜産大学獣医微生物学教授就任。部内(助教授)より昇任。

<訃報>

内田和夫先生 日本獣医畜産大学教授(64才)平成4年12月26日腎不全のため逝去。

御自宅：世田谷区北烏山3-1-6-202

☎ 03-3309-1706

徐慶一郎先生 元関東通信病院微生物学検査科部長(77才)

平成5年1月6日肺炎のため逝去。

御自宅：新宿区南町町57 ☎03-3269-6866

白土寿一先生 日本大学名誉教授(元日本大学松戸歯学部細菌学教授)(86才)膵臓癌のため逝去。

御自宅：杉並区善福寺1-13-2

☎ 03-3390-0435

中村敬三先生 国立予防衛生研究所名誉所長(96才)

平成5年2月23日心不全のため逝去。

御自宅：練馬区中村北1-3-4

☎ 03-3989-1937

◇編集後記◇

関東支部は全会員数の43%を擁し、その責任は重い。特に島村支部会長のその思いは編集会議にも伝えられて、リーディング支部としての在り方に、私達はしばしば議論を交わした。日々は小さな多数の問題に溢れているが、常に原点に立ち返ると、迷いが軽減することを経験する。この原点がいまは“活性化”に置かれている。本号でも、この言葉が多数見受けられ、学会を挙げてこの思いは浸透したように思われる。組織検討委員会からのご意見でもそのことがよく理解できる。具体的な多くの提案が示されていて、期待される。フォーラム欄でも随想的なものより学問・研究内容に関する記事が多くなった。そんな中で、研究や業務内容の異なる先生がたからのご意見は、新鮮で楽しい。

年度末と春の細菌学会を控えてご多忙の中を、原稿をお寄せ下さった先生がたに厚くお礼申し上げます。(T. T.)

日本細菌学会

関東支部ニュース

第19号

(1993.4.1)

発行：日本細菌学会関東支部

〒142 東京都品川区旗の台1-5-8

昭和大学医学部細菌学教室内

☎ 03-3784-8131
